
仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

皆大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王LYRICAL As to Strike
rs

【Nコード】

N3059Y

【作者名】

皆大好

【あらすじ】

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した。仮面ライダーと出会った者達はある者は二つの顔を持つ状態に、ある者はその者達を支える立場でありながらも未来へと一步を踏み出していた。

新暦0071年。

同窓会的任務の中で彼女達は会うことになる。

『仮面ライダー』に。

これは心と顔を隠す決意をした一人の戦士の物語。

第一話 「青い仮面ライダー」 (前書き)

皆様。

初めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

皆大好きです。

それでは第三部の開幕です！

第一話 「青い仮面ライダー」

新暦0071年。

これはミッドチルダの暦である。

『新』と名がつくという事は一応『旧』もあるということだろうが、今はさしたる問題ではないので取り上げない。

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した世界。それでも時間は等しく時を刻んでいる。

＊

『時の列車』

それを手にした者はある事を決断しなければならない。

『普通』の生活を捨てるという事を。

＊

空は快晴であり、心地よい風が吹く季節。

時刻は『午後』に差し迫っていた。

市立聖祥大付属中学校あと一時限受けければ学生達にとっては憩いとなる『昼休み』になるのだが、集合時間が迫っているので早退しなければならぬ。

『三年二組』の教室をフェイト・Ｔ・ハラオウンが出ようとしていた。

「じゃフェイト。いつてらっしゃい。授業のノート取っとくからね」「うん。ありがとうアリサ。あといつものでいいんだよね？」

フェイトは学生生活のケアをしてくれているアリサ・バニングスに

感謝しながら代償はいつものものでいいのか確認を取る。

「そうそう。報酬は翠屋のケーキセットでいいわよ」

「わかった」

フェイトは笑みを浮かべて鞆を持って教室を出ていく。

このやり取りだが、最初はアリサが冗談半分で言っただがフェイトはそれを本気で受け止めて、『自分達の学生生活があるのはアリサやずずかのお陰』という感謝の意を込めて返した事から始まっている。

学生生活が守られる代償がケーキセットというのは、正直破格な取引といってもいいだろう。

「なのはも！気をつけてね！」

「はぁーい！」

アリサがフェイトと同じ目的を早退しようとする高町なのはにも声をかける。

無論彼女もフェイト同様に学生生活のケアの代価として翠屋のケーキをご馳走するようになっていく。

自分のお小遣いで買っているので、やましい事は何一つない。フェイトを追うようにして、なのはも教室を出た。

『三年六組』でも同じ様なやり取りが行われていた。

「ほんなら、ずずかちゃん。また月曜にな。お礼は例の物でええんよね？」

「うん。いつもありがとう。はやてちゃんも気をつけてね」

「何言ってるの。私等がこうして学生できるんもみーんなずずかちゃん、アリサちゃんのお陰なんやで。もうありがたくてありがたくて」

八神はやてが仏様を拝むようにしてずずかに手を合わせて拝む。

「は、はやてちゃん！？もうそれはやめてって……」

ちなみにこんなやり取りも日常的に行われているため、クラスメイト達は温かい目で見ていたりする。

はやてが早退し、残りの授業の面倒を月村すずかに頼んでから教室に出ると廊下にはフェイトが歩いていた。

「はやて」

「フェイトちゃん。なのはちゃんは？」

「後から来るから大丈夫だよ」

「そか」

フェイトとはやてが他愛のないやり取りをしていると、

「フェイトちゃん。はやてちゃん」

遅れてなのはが走ってきた。

はやてとフェイトは互いに顔を合わせて笑っていた。

三人は人目のつかない学校の屋上に移動していた。

既に授業が開始しているのか、屋上には三人しかいない。

『三人とも準備は出来てる？忘れ物はない？』

三人が持っているデバイスを紹介して、エイミィ・リミエッタが確認するように言う。

「はい！大丈夫です！」

「私も大丈夫だよ」

「問題ありません」

なのは、フェイト、はやてはそれぞれ返事をする。

『それじゃ、いつもの場所に転送ポートを開くね』

エイミィの言葉に三人は頷き、それぞれ待機状態になっているデバ
イスを掌にとつて翳す。
棒

「レイジングハート！」

『イエス。マイマスター』

主の声に紅い珠――レイジングハート・エクセリオンが返す。
なのは

「バルディッシュ！」

『イエッサー』

野上良太郎から貰った懐中時計と同じくらいもしかしたら比べては
いけないくらいに大切な物――バルディッシュ・アサルトに声を

かけ、相棒は即座に返す。

「リインフォース！」

かつて自らの信念と思いを貫いて消えたリインフォースが残した金色の首飾りを掌に取る。

「はい！マイスターはやて！」

リインフォースと酷似した容姿をしながらも、青い瞳に愛嬌のある雰囲気でリインフォースと違い子供な体型をしている掌サイズの少女が出現した。

少女――リインフォース^{ツヴァイ}？（以後：リイン）である。

「セーットアップ！！」

三人が同時に翳した。

その直後に校舎の屋上には三人の姿はなくなった。

なのは、フェイトはバリアジャケットを纏い、はやては騎士服を纏っていた。

リインははやての左肩に乗っかっている。

足場を空に移して互いに顔を見合わせてから、

「ゴオオオオ！！」

と第162観測指定世界の空を駆けた。

*

第162観測指定世界の衛星軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「じゃ改めて今日の任務の説明ね。その世界にある遺跡発掘先を二つ回って発見されたロストロギアを確保。最寄の基地で詳しい場所を聞いてモノを受け取って、アースラに戻って本局までの護送！」

エイミイが第162観測指定世界の空を飛んでいる四人（リイン含む）に告げた。

『平和な任務ですねえ』

飛行の心地よさと任務が血腥くない事になのはは安堵し、どこか平和な声色を出していた。

「まあモノがロストロギアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人が揃ってもう一箇所にはシグナムとザフィーラがいるわけだから、まあ多少の天変地異くらいならなんとかしちゃうよね」

エイミイは信頼を込めて言う。

「よろしく頼む。あと今更君達に説明をする必要はないが一応言っておく。イマジンに出くわしたら迷わずに撤退する事。人命第一だからね」

エイミイの後ろにいるアースラ艦長であるクロノ・ハラウンが現場にいる面々に一言言う。

了解と声が聞こえた。

今日、時空管理局はイマジンに対しては常に後手に回り肝を嘗めさせられている。

イマジン一体と戦うのに何十人の武装局員を用いて戦わなければならないという事実だ。

しかもそれで勝てればいいのだが、現実問題としては十回イマジンと戦って勝てるのは一、二回である。

結果は『快勝』でも『楽勝』でもない『辛勝』なのだ。

個人対個人ならばその結果でもいいだろう。

だが、一部隊対個人の戦いでその結果はあまりに情けないというのが組織の上に立つ者達の意見でもあり、世間の評価でもある。

「彼等の存在が今になって肌身に染みるなんてな……」

「本当だね。良太郎君と初めて会った時に言われたんだよね？イマ

ジンは決してそんなに甘い相手ではないって」

「ああ。あの時は単純な過大評価だと思っていたが、こうして仮面ライダー彼等がいない時にイマジンと対峙してみてそれが決して誇張とかではないと理解したよ」

「仮面ライダーっていえばクロノ君。聞いたことない？『青い戦士』とか『青い仮面ライダー』の話」

「何度かは聞いたことあるよ。正体不明で神出鬼没。ここ最近になつてからか。この話が飛び交うようになったのは……」

クロノは腕を組んで正体を考えるが、思い当たる節がない。

エイミイにしても同じだった。

いつまでも雲を掴むような噂話をするよりも任務を遂行している面々の事に話題を切り替えることにした。

「みんな最近忙しいし立場も固まってきたから、こーやって同じ任務に関われるのもあと何回あるのかなあ」

エイミイとしては皆が個々に羽ばたいていく事は悪いとは思っていない。

だが寂しさがあるのもまた否定できないのだ。

「そうだな」

クロノとて表情には出さないが、複雑といえば複雑だったりする。

いつも当たり前と思っていた事が変わっていく。

経験がないわけではないが、正直慣れないし順応する努力をしなければならぬのは常だ。

「あの子達の研修期間が懐かしいやー。あの頃は本当艦内も賑やかでさあ」

「僕は騒々しくてかなわなかったがな」

エイミイとクロノが研修期間の頃を思い出しながら素直な意見を述べていた。

「ま、今日は楽しい同窓会的任務。終わったら賑やかにやりましょ」

「まあ仕方ないな」

二人は一通りの談話を終えると、仕事に集中する事にした。

たとえ内容が楽でも気を抜いていいという理由にはならないからだ。

*

北部定置観測基地に向かう中で四人はある話題が飛び交っていた。現在手ぶらだし、ただ目的地に向って飛んでいくだけでは味気ないので誰からともなく話をする事になったのだ。

「『青い仮面ライダー』の正体が……。良太郎達じゃないことは確かだよ」

フェイトが噂の人物がチームデンライナーではないと断言した。

「侑斗さんやデネブちゃんでもあらへんね」

はやてもチームゼロライナーではないと即断する。

「どうしてなんですかあ？マイスターはやて」

はやての左肩に乗っているリインはフェイトと自分の主があっさりと言い切ることがわからない。

彼女は実をいうと『仮面ライダー電王』や『仮面ライダーゼロノス』の事は聞かされているが、実物を見たことがないので今ひとつピンとこなかったりしていた。

「リインも実物を見たら私とフェイトちゃんがあっさりと違つと言いつけるんもわかるんやけどね」

写真一つ残っていない現在では彼等がこちらに赴いてくれない限り不可能な事だ。

「そうだよねえ。口で細かく言うよりも実際の電王さんやゼロノスさんを見てもらったほうが早いもんね」

なのはも笑みを浮かべながら、はやての意見に賛同する。

「リイン。電王さんはね、赤、青、金、紫とか色々形態を持ってるんだよ。そしてゼロノスさんは緑色と錆びた感じの赤色の二つの色を持ってるんだ」

なのはがリインに電王とゼロノスの装飾しているカラーリングについて説明した。

「でもでもそれだとゼロノスさんには当てはまらなくても電王さんには当てはまっちゃうですよ？」

「リイン。噂の仮面ライダーの色はきつと青色がメインカラーだと思うよ。それに電王にとって青色はあるけどメインじゃないんだよ」
フェイトが補足するようにリインに告げる。

「ふええ〜。そうなんですかあ」

リインは感心していた。

「それで話を戻すけどな。なのはちゃん的には青い仮面ライダーについてどない思う？」

「私？」

「うん。私も聞きたいな」

はやてが話題を戻してなのはにふっかけ、フェイトも意見を求めていた。

「正体不明に神出鬼没。個人でイマジンと戦う戦闘力。私達が出動する前に解決してしまう手際の高さからして変身者は変身していないくても相当強いと思うよ」

なのはは戦技教導官として言う。

「短時間でイマジン不倒せらるって事はそれだけイマジンの生態を知っているという事になるし、相当場慣れしていきやできない事だよ」

そして戦技教導隊で明らかになっている事実を話し始めた。

なのはは戦技教導隊入りした際に、上司に訊ねた事がある。

「魔導師何人がかりでイマジン不倒せますか？」と。

すると上司はこのように答えた。

「イマジン一体倒すのに魔導師ランクがC-からA+の魔導師が五十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AA-からAA+なら四十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AA-からAAA+までなら十人がかりで二十分以内に仕留めなければ負けは確定。S-からSSS+までの場合、単体で挑むなら五分以内に仕留めなければ負けは確定」と言われた。

この上司の言葉は定義づけられている魔導師ランクの実力。魔法を使用するのが人間である事を踏まえての事である。

元々、身体機能が人間よりもはるかに優れているイマジンと戦うのだ。多少のズルはやむなしとしてもこれほどの差があるとは思わなかったくらいだ。

「改めて聞かされると……」

「良太郎達が凄いつて思わせられるね」

なのはの説明にはやてとフェイトは素直な感想を述べた。

「あ、目的地ですう」

リンが指差す方向に北部定置観測基地があつた。

目的地に到着すると、三人はバリアジャケットを解除して管理局御用達の制服になる。

「さて基地の方とは……」

なのはが周囲を見回すと、男女一組の管理局員が敬礼していた。知的なイメージがある眼鏡をかけた男性と穏やかな雰囲気を持った眼鏡女性だ。

「遠路お疲れ様です。本局管理補佐官グリフィス・ロウランです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「ありがとうございます」

なのはは眼鏡男性――グリフィスと眼鏡女性――シャリオに感謝の言葉と敬礼で返す。

「ご休憩の準備をしてありますのでこちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

グリフィスが三人を休憩室へ案内しようとするが、なのははやんわりと断った。

「私等、これくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやろ？」

はやてはグリフィスと面識があるのか慣れたんだ感じた。

「はい……。存じ上げてはいるのですが……」

グリフィスは重々わかっているが、それでも形式的なことなので引くに引けない。

はやてとグリフィスのやり取りになのはとフェイトは頭上に疑問符を浮かべる。

「ああ、二人は会った事なかったんやったね。こちらの彼はグリフィス君。レティ提督の息子さんやで」

はやてが簡潔にグリフィスの紹介をした。

紹介を聞いた二人は「ああ、なるほどお」とか「確かに似てる」というコメントを返した。

「フィニーノ通信士とは初めてだよな？」

フェイトもなのはもはやても初対面だ。

「はい！でも皆さんの事はすごく知っています！！」

シャリオの表情はアイドルや芸能人を見て酔っている一般市民の表情に似ていた。

「本局次元航行部隊のエリート魔導師。フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官！」

シャリオが憧憬の眼差しをフェイトに向ける。

「いくつかの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札。八神はやて特別捜査官！」

次に同じ眼差しをはやてに向けた。

「武装隊のトップ、航空戦技教導隊所属。不屈のエース。高町なのは二等空尉！」

最後になのはに向けてきた。

「陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄ですうー！！」

シャリオが三人を前に頭が落ちてしまうのではないかというほどの勢いで頭を下げていた。

三人はするように誇張されるのはいつまで経っても慣れていないので苦笑いを浮かべるしかない。

「リインフォースさんの事も聞いていますよー。とっても優秀なデ

「バイスだつて」

「ありがとうございます」

「シャリオはリンと握手するために右手の人差し指を出す。リンは人差し指を両手で握った。

握手が一応成立したのだ。

「シャリー。失礼だろう」

「あ、いけない。つい……」

「グリフィスはテンション高めな状態になっているシャリオを窘める。

「シャリーって呼んでるんだ？仲良し？」

「フェイトがグリフィスにシャリオとの関係を訊ねる。

「す、すみません。子供の頃から家が近所で……」

「グリフィスがどのように答えたらいいのかわからない。

「幼馴染だ！」

「なのはが二人の関係を言い当てる。

「いいね。私達も幼馴染だよ」

「フェイトも自分達の間柄を打ち明ける。

「幼馴染の友達は貴重なんだから。大切にしてね」

「「はいっ！」」

「なのはが幼馴染と言う間柄を持つ先輩として後輩二人に指導した。

*

「時空管理局本局に『無限書庫』がある。

「デジタルが主流ではあるが、ここだけはアナログであつたりする。

「日々書物が増え続けるので整理が難しくなるのが特色だ。

「何せ一日に書物化して棚に入るのは一冊ではないのだから。

「それが日々続くのだから、常人なら発狂しかねないだろう。

「なお武装局員に無限書庫の業務をさせた場合。このような感想が返ってきた。

「出口のない迷路にいるみたいだ。気が変になりそうになる」

「これなら現場で犯罪者を追い掛け回した方がいい」

「本当に適正不適正が問われる場所」
などである。

上司が聞き分けのない部下に対して、「無限書庫に放り込むぞ」という脅し文句があったりする。

なおこの脅し文句を聞いた部下は素直に上司に従うというエピソードがあつたりする。

現在も無限書庫には管理局の制服を着た司書達が数名、本棚や本と睨めっこをしていた。

『ユーノ。そっちのデータはどうだ？』

クロノが宙にモニターを展開して訊ねてきた。

その中で私服姿の少年がいた。

無限書庫司書長のユーノ・スクライアである。

「もう解析を進めている。なのは達が戻る頃には出揃うよ」

『そうか』

ユーノの返答にクロノは満足していた。

「はいよ。ユーノ」

アルフに似た容姿をした少女が数冊の本を持ってユーノに渡してきた。

「ありがとう。アルフ」

アルフに似た容姿をした少女。コレが現在のアルフの姿である。

「アルフもすっかりその姿が定着しちゃったね」

「ああまーねー」

ユーノの台詞にアルフは感慨深く思う。

「フェイトの魔力を食わない状態を追求していったらこーなっちゃてねえ」

アルフは腕を組んで思い出す。

フェイトの魔力を食わないために試行錯誤した日々をだ。

「あたしはフェイトを守るフェイトの使い魔だけどさ、フェイトはもう十分強いし一人じゃないしね。そばにいて守るだけが守り方じ

やないしさ。家の中のことをやったりするのも結構楽しいし、来年にはクロノとエイミイも結婚する予定だし子供とか生まれたらもつと忙しくなるしね」

『アールフーー！その話はまだ秘密だつて！！』

「えー、まあいーじゃん」

モニターにはエイミイが映し出されて、顔を紅くしていた。後ろにいるクロノも紅くなっていた。

「ええと。おめでとうございます。クロノもやっと決心したんだね……」

いきなり暴露されたエイミイに同情しながらもユーノは祝福の言葉を送った。

『うつ……ありがとう。それよりユーノ君はなのはちゃんと何ともないわけ！？』

エイミイが仕返しとばかりになのはとユーノの関係を訊ねてきた。

「なのはは僕の恩人で大切な幼馴染ですよ。それだけですよ。本当に」

ユーノは即答した。

『この二人はまだ先に進みそうにないか……』

エイミイは苦笑しながらもモニターを閉じた。

「よし！モニター閉じたね。もう解いていいよ」

アルフの声と共にユーノの姿が光りだす。

やがてユーノから男性司書へと姿が変わった。

「ふうー。疲れましたあ。司書長の姿に化けてハラOWN提督と会話するのってこんなに緊張するんですね」

「まあ相手がクロノ達だからね。一見さんなら簡単には見破れやしないさ」

アルフが変身魔法を用いていた司書に労いの言葉を送る。

「アルフさん。司書長、大丈夫でしょうか？」

女性司書がユーノの心配をする。

「アイツが考案したプランAを無事に成し遂げるのがあたし達が

ユーノにできる事だしね。後はアイツが無事に帰ってくるのを祈るしかないからねえ」
アルフが天井を見上げて言った。

*

第162観測指定世界に私服姿のユーノと左肩に乗っている白い毛並みに青いメツシユの入ったフェレット……ロッキーがいた。
眼前にはこおろぎ型のイマジンであるクリケットイマジンがいた。
目的が何なのかはわからないが、イマジンが単体で動く時は『契約者の望み』か『はぐれイマジン』の場合は自分の意思と相場が決まっている。

「そこをどけえ。俺は今からロストログアを探すんだからよお」
その言葉からして契約者持ちのイマジンだとユーノは推測できた。

「ロストログアの盗掘が違法だってわかっててやってるんだね？ 君の契約者は……」

となると契約者は裏のブラックマーケットでロストログアを売ろうとする『死の商人』といった所だろう。

契約を履行させてしまえば『時の運行』だけでなく、罪のない人間が泣きを見るのは確実だろう。

「残念だけど契約者さんの望みは叶わないんです！」

ロッキーがユーノの方から降りて左前脚を出して宣言する。

「あん？ 何だよ」

「僕達が君を倒すからだ！」

訝しげな表情を浮かべているクリケットイマジンに対して、ユーノとロッキーは真剣な表情になっていた。

「ユノさん！ 僕、本当の姿に戻ってもいいんですよね？」

「もちろん。思いつきり暴れていいよ。プロキオン！」

「はい！」

ロッキーが確認するように訊ねると、ユーノは二つ返事で肯定する。

それからユーノは自らの身体エネルギーを用いてベルトを出現させて腰に巻きつけた。

カチリと音がする。

そのベルトはデンオウベルトではなく、ゼロノスベルトに酷似しておりクロスディスク部分は青色と白色になっていた。

ユーノはパーカーのポケットから黒いケースを取り出して、中身を取り出す。

それは黒い素体に青色のカラーが施されているカードだった。ちなみに裏面は白色のカラーが施されている。

バイオリンで奏でているようなミュージックフォーンが流れ出す。

「変身！！」

ゼロノスベルトのバックル上部にあるチェンジレバーを右にスライドさせてからカードを挿入した。

『ベテルギウスフォーム』

電子音声で発すると、ユーノの身体に仮面ライダーゼロノスと酷似したオーラスキンに纏われていく。

青色が目立つオーラアーマーが装着され、両肩、両下腕、両ふくらはぎに二センチほどの刃のような突起が出現する。

そして、頭部にはトリケラトプスの系統であるネドケラトプスを髣髴した電仮面が銀色のデンレールを走り、形状を象って装着される。

「はあ！！」

叫ぶと同時に右手で薙ぎ払うような仕種をする。

ブオンという音が鳴って、クリケットイマジンを抑え反らせた。ロッキーが全身を輝きだし、見る見るうちに大きくなっていく。

身長は横にいる戦士より若干高いくらいになっていた。

フェレットと仮面ライダーのイメージが混濁して誕生したフェレット型のイマジンであるプロキオンである。

ちなみにロッキーとは愛称であって本名ではない。

「お、お前！仮面ライダーゼロノスか！？」

クリケットイマジン^①は興奮気味に叫ぶ。

別世界側のイマジンでもこのくらいの知識は有している。

「違いますよ。我が主は仮面ライダーゼロノスではありません」

プロキオンが即座に否定する。

戦士はゆつくりと歩きながらクリケットイマジンに告げる。

「もう一つのゼロノス。 アナザー ANOTHERゼロノスだ」

この時、この場に仮面ライダーANOTHERゼロノス（以後：Aゼロノス）が降臨した。

第一話 「青い仮面ライダー」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!」

Aゼロノス降臨!

その戦闘力はいかに?

同窓会的任務にも怪しい兆しが見え始める。

第二話 「舞台表と舞台裏」

第二話 「舞台表と舞台裏」 (前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。
感想を書いてくれている皆様。

それでは第二話どうぞ。

第二話 「舞台表と舞台裏」

『ゼロノスカード』

それは周囲の者達が使用者に関する『記憶』を忘却する能力を持つカード。

知らずに使った者には『後悔』が。

知って使う者には強い『覚悟』が必要とされる。

*

『皆さんの速度ならポイントまでは十五分ほどです。ロストログアの受け取りと艦船の移動までナビゲートします』

シャリオ・フィニーノが定置観測基地から現在、目的地まで飛行している高町なのは、フェイト・T・ハラウン、八神はやてに告げた。

「はい。よろしくね。シャーリー」

「グリフィス君もね」

フェイトとなのはが快諾した。

『はい!』

二人のナビゲーターが元気よく返事した。

「しかし、私達も今年で六年目か」

はやて達は九歳から時空管理局で働いているので六年と既に『ベテラン』と呼ばれてもおかしくない。

「中学も今年で卒業だしね」

フェイト達は今年聖祥大付属中学を卒業する事になっている。

「卒業後は今より忙しくなるかなあ」

なのはの言うように、この三人は中学校を卒業してからは高校に進学するつもりはない。

時空管理局の仕事の本業にしていくなのだ。

はやては元々両親がいなかったため、その手の選択肢に異議を唱える者はいない。

財政面でバックアップをしてきている元時空管理局提督であり、現在は地球で隠棲生活を送っているギル・グレアムは『与えられた時間を仕事だけでなくしっかりと楽しむ事を約束できるならば構わない』という条件をつけた。

フェイトの場合は家族全員が管理局員であるため、進路がそのような事に関してはハラオウン家全員反対を唱えたりはしなかった。ただし、グレアム同様に『仕事に忙殺されずに人生を楽しむという事が条件』がリンディ・ハラオウンからつけられていた。

この手のことで一番悩まされるのがなのはである。

彼女は、フェイトやはやてと違ってそこまで『魔法』の世界にどっぷり浸かる必要性がないといえない。

特に罪人扱いを受けて恩赦を貰った事もないので変に引け目になることもない。

高校に進学して掛持ちしながら業務に取り組んだからといって後ろ指を差されることはないだろう。

先の二人と違って、なのはに関しては揉めに揉めまくったのはいうまでもない。

リンディが仲裁を取り計らう中でやっと丸く収まったくらいだ。

しかし、なのはにも先の二人と同じく『条件』がつけられていた。

『気負わない事。時折は帰ってくる事。そして人生を楽しむ事』である。

保護者達がこのような条件をつけたのには理由がある。

それは『時の運行』を守っている仮面ライダー電王と仮面ライダーゼロノスを知ったことが大きな原因となっている。

彼等の存在によって、当たり前のように存在している『時間』が実

は脅かされたり護られたりしているものだと思ったからだ。

誰にも称賛されずに、日の目の当たらない所で戦っている者達の事を考えると護られている側にしてみれば『時間』を大切に扱う義務が生じると感じるのは不自然なものではないだろう。

まさに生き急ぎとは真逆の事である。

生き急ぎとは限られた時間を有効には使わずにいたずらに放置している行為といってもいい。

ここにいる三人だけでなく、保護者達も教わったのだろう。

ここにはいない別の世界にいる『仮面ライダー』に。

「あの時は揉めたなあ」

なのはは、頬を掻きながらその時の事を思い出していた。

「でも義母さん達があんな条件をつけてくるとは思わなかったよ。

私達そんなに生き急いでるようにみえたのかな？」

フェイトも思い出しながら呟く。

「多分、そんな風に見えたんやろなあ。アカンなあ折角侑斗さん等が命懸けで護ってくれた時間やのにそんな風に使おうとしてたなんて」

はやてもしみじみ考えてから苦笑いを浮かべながら反省する。

「そうだね。今度良太郎達に逢う時に、そんな生き急いでたら怒られちゃうもんね」

「良太郎さん。怒ったら怖いもんね……」

フェイトもなのはも野上良太郎の起こった姿を思い出して、少しブルツと震えた。

「そんなに怖いんですか？」

リインは野上良太郎を知らないため、怒った姿を知るはずもないので管理局のエースと呼ばれている二人が心底怯えたような態度を取ったので、はやてに訊ねた。

「そうやね。本気で怒った野上さんには多分やけど誰も勝てへんよ」

「へ？」

リインが間抜けな声を出してしまう。

主の言っている事が信じられないのだ。

「シグナムやヴィータちゃんでもですか？」

「良太郎はシグナムに勝った事があるんだよ」

「ほ、本当ですかぁ！？」

フェイトの言葉に信じられない、という表情をリンはしていた。

「うん。それは間違いないよ。私もはやてちゃんもその現場を見てるしね。それにヴィータちゃんは良太郎さんを怒らせたりはしないって心から誓っていると言ってたしね」

なのはが補足する。

「それにシグナムとフェイトちゃんは野上さんを巡ってのライバルなんやで」

リンには実を言うところの手の事は知らされていない。

リンに訊ねられる事もなかったからだ。

「ふええ。そうなんですか」

「は、はやて！」

「いずれはバレるんやからええやないの」

フェイトは顔を真っ赤にして抗議するが、はやては涼しい顔をしている。

「バレるってバラしたのは、はやてちゃんだよ……」

なのはがツツコミを入れる。

「自分のことを棚にあげて言わないでほしいよ。リン。はやてはね、桜井さんから貰ったカードを毎日一時間懸けて磨いてるんだよ」

「ちょっ……フェイトちゃん！それは内緒やって言うたのに……」

「いずれはわかつちやうんだからいいじゃない」

自身の痴態(?)を暴露されて、はやては顔を紅くして睨むがフェイトは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「はやてちゃ……マイスターはやては、ユウトさんって人が好きなんですか？」

左肩に乗っかっているデバイスが無邪気に主に訊ねる。

「な、ななななに言ってるの！？リンー！わ、私と侑斗さんはそ

んな関係やあらへんよ！それに私の片想いやし……」

真っ赤な顔が更に真っ赤になって否定しようとするはやてだが、語尾がどんどん小さい声になっていた。

「二人ともそろそろ……ね？」

この二人がこういうやり取りをすると必然的になのはが仲裁役になっってしまう。

なのはは二人が純粹に一人の人間を想える事が羨ましいと思った。自分にも正直、そう想える人がいるのかどうかと訊ねられると「気になる人がいる」と答えてしまう。

『好き』か『嫌い』かの二択だと『好き』だと答えられる。

だがこの『好き』は、フェイトやはやてが一途に想い続けている原動力となっているそれとは明らかに違っている。

それにその人物は明らかに何かが変わったようにも思えた。

根拠はないし、そのような事を当人に訊ねたとしてもはぐらかされるのがオチだろう。

相手は自分よりもはるかに口達者なのだから。

「みんなは卒業後はどうなるの？私は教導隊の一員としてあちこち回る事になるんだけど……」

なのはは話題を切り替えると同時に自分の今後の凡その予定を告げた。

「私は長期の執務官任務を受ける事になるね」

フェイトも答える。

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しや。ミッド首都の南側で家族六人で暮らせる家。えーカンジのトコを探し中やねんけどな。決まったら遊びに来てな。二人とも」

「うん！」

「行く行く！」

フェイトとなのはが二つ返事で答える。

「リインも、はやてちゃ……マイスターはやてと一緒にお待ちしてるです！」

リンも笑顔で言う。

「あはは」

「そんな堅い言い方しなくても『はやてちゃん』でいいんじゃない？」

「う……」

何度も言い換えるリンがおかしいのかフェイトは笑い、なのはは呼びたいようにに呼べばいいのではと

打診するが、リンとしてはそれを甘んじる気はないようだ。

四人はそのような談笑をしながら、空を駆けていた。

*

北部定置観測基地では、護送隊のナビゲートをするためにグリフィス・ロウランとシャリオ・フィニーノがモニターに映る映像の変化を注意しながら見ていた。

「あれ？発掘地点と通信が繋がらない？」

シャリオが異変を口に出した。

「本当に？」

グリフィスが確認するように訊ねる。

シャリオはもう一度キーボードを叩きながら試みるが、結果は同じだった。

「本当だ……」

「一体どうなってるんだろ……」

グリフィスはシャリオが凝視している画面を見るが、『通信不能』と表示されていた。

またも警報が鳴った。

「今度は何？これってまさか……」

グリフィスが担当している場から鳴り響いており、席にモニターを戻ってみてみるとそこには見たことがない三人が映し出されていた。グリフィスは中央モニターに映し出す。

「もしかしてこれって……」
シャリオも映し出された映像を見て、驚愕の表情を浮かべていた。
そこに映し出されていたのは二体のイマジンに一人の青色が目立つ戦士だった。

「もしかして最近噂になってる……」

「仮面ライダー……」

シャリオの続きをグリフィスが締めた。

*

目的地が視認できる範囲になると、四人はその光景を見て異変を感じた。

それは『楽しい談話』の時間の終了にもなる。

四人の表情が『少女』から『魔導師』になっていた。

現場上空に辿り着くと、発掘をしていた大学生二人が十体近くの楕円型の機械に襲われていた。

「現場確認。機械兵器らしき未確認体が多数出てます！」

「ん！」

リインが解説すると、はやてが頷いた。

「フェイトちゃん！救助には私が回る！」

「私は遊撃する！はやてとリインは上から指揮をお願い！」

「了解！」

なのは、フェイトが自身の役割を告げ、はやてとリインは了承してその場で散開した。

「おし！やるよリイン！」

はやては左掌に乗っかっているリインに呼びかける。

「はいです！」

リインは了承して両手を広げてそのまま、はやての胸元に飛び込んだ。

激突はせずに溶け込むようにして入っていった。

『ユニゾン・イン!』

はやての髪が色素の薄い色になり、瞳の色が青色となる。

右手には『騎士杖』であるシユベルトクロイツが握られていた。

「中継!こちら現場!発掘地点を襲う不審機械を発見!強制停止を開始します!」

なのはが北部定置観測基地へと連絡する。

『本部に連絡します!』

「お願い!」

シヤリオが返答し、フェイトは念押しに頼んだ。

「あ……」

「ああ……」

大学生二人は機械兵器の攻撃にもはや『最期』が来ると直感した時だ。

機械兵器が中央にある発射光が輝きだして、発射しようとした時だ。なのはが素早く着地して、右手を前に出す。

バリア系の魔法障壁を展開させる。

機械兵器が発射されたレーザーを見事に防ぎきる。

バシンと言うような音が鳴り響くが、その魔法障壁には破損はあるか亀裂一つ入っていない。

なのはが大学生二人を無事に守っているのを確認してからフェイトはバルディツシュ・アサルトを天にかざす。

「プラスマランサー!」

『イエッサー』

フェイトの左右にバチバチと稲妻が帯びた黄金の魔力球が数個出現した。

やがてそれは黄金の環状魔法陣と鍔やっつとなる。

「ファイアっ!」

フェイトの掛け声と同時に黄金の鍔は一直線に機械兵器に向ってい

く。

機械兵器は『避ける』という事を知らないのか全弾直撃する。

「大丈夫ですか？」

「は……はい」

「あれが何故襲ってきたかはわかります？」

なのはは助けた大学生二人に襲われた事情を訊ねる。

「わかりません。コレを運び出していたら急に現れて……」

大学生の一人が両手で抱えているバンドで止められている木箱をなのはに見せた。

『広域スキャン終了。人間はあの二名だけです！』

はやての内にいるリインが告げた。

「ん！」

はやてはその報告に頷く。

「あれは機械兵器……？」

『該当データはありません』

フェイトは腑に落ちない表情をしており、バルディッシュ・アサルトが短く眼前の敵が過去にも存在していたかどうかを照合した結果を告げた。

（当てたけど、倒した感触がまるでない……）

黄金の鎧は確かに機械兵器に直撃した。

だが、破壊したという実感がまるでないのだ。

何故そのように感じるかの答えは機械兵器自身がネタをばらしてくれるのを待つしかない。

『中継です！やはり未確認！危険認定破壊停止許可が出ました！』
シャリオが本部の指示を告げてくれた。

「了解！発掘員の救護は私が引き受ける！なのはちゃん！フェイトちゃん！思いつきりやってええよ！」

「了解！」

はやてがGOサインを送り、二人が承る。

機械兵器が何かを展開した。

足元に魔法陣が展開していないので、魔法ではないと思われるが似ているものだろうと推測しながら三人は凝視する。

『マスター』

「フィールドエフェクト？」

レイジングハート・エクセリオンが主の判断を仰ぐ。なのは

基本魔法防御四種の一つであり、『フィールド』とは範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御である。なのはが先程用いていた『バリア』系とは違い、展開範囲が広く効果によれば手も足も出せなくなってしまう厄介なものにもなる。

「様子見てワンショット！レイジングハート！」

『アクセルシューター』

なのはは機械兵器に向けてレイジングハート・エクセリオンを構える。

今から放つ一発を決め手とは考えず、機械兵器がどのような効果を持つフィールドを展開したのかを探るための一発だ。

ガシャンとレイジングハート・エクセリオンのヘッド付近のカバーがスライドしてガシャンと音を立て、蒸気を噴出しながら空になった薬莢を排出する。

「シュートオオオオ！！」

大きな桜色の魔力球から光線が走り先端には小型の魔力球が数個、機械兵器に向って飛んでいく。

機械兵器に直撃すると思われたが、展開したフィールド内に桜色の魔力球が侵入すると『球』としての形を保てなくなりやがて微粒子となって消滅した。

「無効化フィールド！」

なのはは展開したフィールドの正体を見極めた。

アンヌキワザルト
「AMF……。AAAランクの魔法防御を機械兵器が……」

フェイトはその現実を受け入れながらも、このようなものを制作した者がまともな輩ではないと本能的に感じた。

（はわわっAMFって言ったら魔法が通用しないってことですよ！

？魔力結合が消されちゃったら攻撃が通らないです！)

はやての内にいるリインが狼狽していた。

AMFはいわば魔導師を無力にする事さえ可能なフィールドであり、戦闘キャリアの薄いリインの言う事はしごく尤もな事である。

「あはは。リインはまだちっちゃいなあ」

はやてはうるたえるリインとは対照的に落ち着き払っていた。

(ええっ!?)

はやてが言う『ちっちゃい』とは身体的にという意味ではなく、精神的にという意味であり『幼い』とか『経験が足りない』という意味が含まれていたりする。

「憶えておこうね。戦いの場で「これさえやっとけば絶対無敵」なんて事はそうそう滅多にないんだよ」

なのはは真剣な表情でリインに伝える。

レイジングハート・エクセリオンはガシユンガシユンとカバーをスライドしながら音を立てて蒸気を発しながら空薬莢を二個排出する。フェイトのバルディッシュ・アサルトもカバーがスライドして内部に組み込まれたシリンダーが回転してガシユンと叩きつけるようにしてカバーが元の位置に戻った。

その動作を計二回行う。

「どんな強い相手にもどんな強力な攻撃や防御の手段にも、必ず穴はあつて崩し方もある」

はやてが解説を始める。

その間にフェイトを中心にして、黒い雷雲が出現する。

ゴロゴロゴロと雷の音が鳴り始める。

なのはは最寄の地面にレイジングハート・エクセリオンを向けて威力が小さい魔力砲を放つ。

地面が抉れ、いくつかの小さな岩となり桜色の環状魔法陣を帯びて浮上していた。

「魔力が消されて通らないなら、『発生した効果』の方をぶつければええ」

はやての言葉どおりに二人は『発生した効果』を目的とした魔法を繰り出そうとする。

「たとえば小石……」

はやてが例える。

「スターダストオオ」

なのはの方は発射態勢が整っていた。

「たとえば雷……」

更にはやてが例える。

「サンダアアア」

フェイトも同じ様に態勢を整えて、後は発射するだけだった。

「「フオールウウウー!!」」

なのはが環状魔法陣を帯びた小岩を、フェイトが魔力で発生させた雷雲から生じる雷を一齐に機械兵器に向って振り下ろした。魔力を帯びた小岩は隕石のように。

雷雲から降り注ぐようにしている雷は天の裁きのように。

機械兵器に触れ、その原型を歪めて機能を停止させた。

小岩に潰されて機能を停止したもののや落雷して内部メカがショートして停止したものなど様々な残骸となって転がっていった。

（ふえええ。すごいですう）

「二人とも一流のエースやからね」

内のリインが感心しているが、はやてにしてみれば慣れた後景であった。

なのはとフェイトの攻撃範囲外にいた機械兵器が向きを変えて離れようとしていた。

「追おうか？」

「ううん。ええよ。こっちで捕獲するから平気やで」

なのはが申し出てきてくれるが、はやては丁重に断った。

二人にばかり働かせて高みの見物というのが嫌なのだ。

（リイン。頼んでええか？）

（はいです！）

はやては内のリインに逃亡する機械兵器の捕獲を任せることにした。
（発生効果で足止め捕獲というところ……）

機械兵器対策を講じながらリインは使用する魔法を考える。

足元に三点の小魔法陣からなる三角形のベルカ式の魔法陣が展開される。

（こうです！！）

リインが発動すべき魔法を放つ。

逃亡を謀ろうとしている機械兵器にリインの足元と同じ魔法陣が出現して形を変えて動きを縛るような動きをする。

フリーレンフェッセルン
（凍てつく足枷！！）

機械兵器が氷漬けとなってその動きを停止した。

氷から噴き出る冷気が寒気を誘うが相手が機械なので反応はない。

「お見事！」

（ありがとうございますですう！）

なのはの褒め言葉をリインは素直に受け取った。

難が去り、護送隊の代表としてフェイトが大学生二人と掛け合っていた。

「これがそのロストログアですね」

「はい……。中身は宝石のような結晶体で『レリック』と呼ばれています」

わかる範囲で詳細を聞いているフェイトをなのはとはやては見ていた。

『……し……こちら……』

聞き覚えのある声なのは達の耳に入った。

「こちらアースラ派遣隊。シグナムさんですか？」

なのはは送信者の名を確認する。

『その声はなのはか？そちらは無事か？』

「機械兵器の襲撃があつたんですが……。まさかそつちも？」

『こちらは襲撃ではなかったがな。危機回避のため、既に無人だったのが不幸中の幸いだったが発掘現場は何もない。先程ヴィータとシヤマルを緊急で呼び出した。あと悪報と朗報の二つがある』

シグナムが『悪報』と言うからには相当悪いものだろう。

なのは、はやて、リインそして大学生との話が終わったフェイトは真剣な表情になっていた。

『まず悪報からだが、この次元世界にイマジンが一体いる。目的はわからん』

『イマジン』という単語を聞いただけで四人の表情は強張った。

出くわした場合は『交戦』ではなく『撤退』が魔導師達の暗黙のルールとなっている。

圧倒的に力量差がある者達なら迷わずこのルールどおりに行動する。それなりに戦える者達はよほど危機に迫らない限りは戦ったりはしない。

そのくらい『仮面ライダー』がない今の別世界^{こゝ}ではイマジンが脅威になっているのだ。

『そして朗報だ。そのイマジンと噂になっている青い仮面ライダーが交戦中との事だ』

*

Aゼロノスとプロキオンはクリケットイマジンと睨みあっていた。プロキオンは両腕をクロスさせてフリーエネルギーを用いてシヤキンと三本の鋭い爪を両手から生やす。

「レッツ、ゴー、バトルです！」

そのままクリケットイマジンに向っていった。

その速度は恐ろしく速い。

クリケットイマジンと間合いを詰めると、右フックを繰り出す。

しかし先に当たるのは拳ではなく三本の爪であるが。

ブオンという音が鳴り、クリケットイマジンはその場にしゃがんでから空振りになるがそのような音が鳴る時点でプロキオンの放った一撃は速い上に重たいのだという事を理解した。

「言葉遣いに騙されたぜ。テメエ、ガキの癖に随分と生意気な戦い方してるじゃねえか!!」

後方に下がってクリケットイマジンはフリーエネルギーで二丁の拳銃を作り出してから、構えて狙いを定めて引き金を絞る。

「!!!」

プロキオンはその場で高く跳躍するとその直後にフリーエネルギーの光線がクリケットイマジンに直撃した。

「ぐふう!!」

プロキオンの奇襲はこの攻撃のための布石ならば抜群のコンビネーションである。

跳躍したプロキオンはクリケットイマジンの後方に着地する。

Aゼロノスの右手には銃が握られていた。銃といっても完全に『銃』の姿をしているわけではない。

ナイフのようにも見える形状だ。

Aゼロノスの専用ツールであるデュアルガッシャー（以後：Dガッシャー）である。

Aゼロノスは空いている左手を腰元に添えているDガッシャーのパーツに手を添えてから外す。

そして、下にあるゼロガッシャーの先端に似たパーツに縦連結させてから拳銃の引き金と密接している側のグリップを握ってから引き抜いた。

フリーエネルギーによって『銃』としての機能を持つDガッシャーバレットモード（Dバレット）へとなった。

左側のDバレットもクリケットイマジンに向ける。

そして引き金を絞る。

ガガガガンとフリーエネルギーの光線がたった一回引き金を絞る

だけで数発発射された。

右手のDバレットも人差し指を引き金に添えて絞る。

左と同じ様にたった一回、絞るだけで数発のフリーエネルギーの光線が発射される。

そのままAゼロノスはクリケットイマジンへと歩み寄る。

「いだっ！あだあ！いだだだあ！！」

クリケットイマジンの体から後ろに足を下げながら火花が飛び散る。Dバレットから発射される光線一発分の威力は仮面ライダー電王ガンフォームのデングツシャーガンモード（以後：Dガン）の弾丸一発の二分の一しかない。

つまり一発食らってもイマジンには決定的なダメージを負わせる事は出来ないのだ。

しかし、DバレットはDガンにはない利点もある。

それは連射性である。

Dガンは一回引き金を絞って一発しか発射されないが、Dバレットは一回絞っても数発発射されるのだ。

それでパワー不足を補っているわけだ。

クリケットイマジンは前方と後方を交互に見比べる。

「ええい！クソオ！二対一じゃ分が悪いぜ！だがなあ電王やゼロノスじゃねえテメエ等ポツと出に負けてやるわけにはいかねえんだよ！」

そう言いながら、両腕を水平に構えて引き金を絞る。

銃口から弾丸が発射され、立ち止まらずにその場で駒のように回り始める。

弾丸を避けながら、Aゼロノスとプロキオンは顔を見合わせて頷きあう。

「変身！」

プロキオンは全身を輝きだして、イマジンからフェレットへと姿を変えた。

クリケットイマジンはまだ回りながら乱射している。

Aゼロノスは跳躍してクリケットイマジンの頭上で逆立ちの態勢をとってから二丁のDバレットの銃口を向けて引き金を絞る。銃口から発射された光線は無数の雨のようにして降り注ぐ。

「ぐわあああああつ!!」

前面にしか注意がなかったため、頭上からは完全に死角となっていた。

「変身！」

プロキオンがフェレットからイマジンへと変えて、その場で軽く跳躍して腰に捻りを加えて左飛び回し蹴りを放つ。

右側頭部に直撃して、左へと飛ばされるクリケットイマジン。

地面に転がるがすぐに起き上がる。

「ユノさん！」

プロキオンが主に次の攻撃を委ねる。

頭上攻撃から無事に着地したAゼロノスは両腕を引いた状態でDバレットを手放す。

スーッと真っ直ぐに落ちるDガッシャーのグリップを順手に握る。

それだけでDバレットからDガッシャーダガーモード（以後：Dダガー）となる。

デンガッシャーやゼロガッシャーと違って組み替える必要がないのも先の二つにはない利点といってもいいだろう。

そしてその二本のDダガーのグリップを向き合わせてそのまま寄せて連結させる。

上下に刃があり、フリーエネルギーで少しだけ大きくなる。

Dガッシャーランスモード（以後：Dランス）へと切り替えてから、クリケットイマジンへの間合いを詰めて駆ける。

「せえいっ!!」

Dランスを袈裟に振り下ろして、火花を飛び散らせてから、

「はああっ!!」

右切上へとDランスで切り上げる。

相手に何かをさせずに繰り出した攻撃なのでクリケットイマジンは

防御をする間もなく、斬撃を食らう。

「ぐわあああっ!!」

Aゼロノスは間合いを開けるために後方へと飛びのく。中腰になって、振りかぶる。

そしてDランスを投げた。

Dランスは手裏剣のように縦回転しながらクリケットイマジンへと向っていく。

回転は次第に増していき、速度も上がる。

クリケットイマジンに回転する刃が触れる。

ガリガリガリガリと容赦なく刃が抉りながら宙を舞う。

DランスはそのままUターンしてAゼロノスの元へと向っていく。

Aゼロノスは右手をかざすとパシッとDランスを受け止めた。

火花を跳び散らせているクリケットイマジンを一瞥してから、Dランスを握った手を下ろして踵を返す。

「契約者のぞ……み……ぐうおおあああ!!」

肉体がダメージに耐え切れなくなり、クリケットイマジンは爆発を起こした。

プロキオンがAゼロノスに駆け寄る。

「やりましたね! ユノさん」

「うん。それじゃ帰ろっか」

Aゼロノスとプロキオンが無尽書庫へと戻る手筈をとろうとした時だ。

彼等の前方には、なのは達が交戦したあの機械兵器が群れを成して現れた。

「アレ全部壊さないと帰れないみたいだね……」

「うえ」

Aゼロノスは向ってくる機械兵器を睨みながらDランスを分離してDダガーへと戻し、プロキオンも悲鳴のような声を上げながらも両腕から三本の爪を出現させていた。

*

第12管理世界。

生活するには問題ない場所であり、自然に恵まれて気候もよくて訪れる人間も決して少なくはない。

そのような世界に『聖王教会』^{せいおうきょうかい}がある。

中央教堂では一人の女性が宙に映っているモニターを見ながら、打ち合わせをしていた。

『ええ。片方は無事に確保しているのですが、もう片方は爆発で発掘現場ごと消滅^{ロスト}してしまっています』

「そうですか……」

女性は落胆するが、人命が下手に奪われていないだけマシだと思つて良しとする事にした。

『爆発現場はこれから調査と搜索を行います』

女性の通信相手はクロノ・ハラウンだった。

「クロノ提督。現場の方達はご無事でしょうか？」

『ええ。現地の発掘員にもこちらの魔導師達にも被害は何もありません』

「そうですか……。よかった」

クロノの言葉を聞き、女性――カリム・グラシアは安堵の息を漏らした。

『現場発掘員の迅速な避難は貴女からの指示をいただいていたからこそですね。騎士カリム』

「危険なロストログアの調査と保守は管理局と同じく聖王教会の使命ですから。名前だけとはいえ、私は管理局の方にも在籍させていただいていますしね」

カリムは聖王教会教会騎士団であり、時空管理局理事官でもある。

「こちらのデータでは『レリック』は無理矢理な開封や魔力干渉をしない限り、暴走や暴発はないと思われませんが、現場の皆さんには十分気をつけてくださるようお伝えただけですか？」

『はい。それでは……』

クロノは了承すると、通信を切った。

「ふう……」

通信が切れてモニターが消えると、カリムはどつと疲労感に襲われたのか両肩を撫で下ろした。

「騎士カリム。やはりご友人が心配でしょうか？」

カリムの背後から一人の修道女が声をかけた。

「シャツハ」

カリムは後ろを振り返りながら修道女の名を呼ぶ。

シャツハ・ヌエラ。

カリム同様。『聖王教会』に所属する修道女である。

「よろしければ私が現地までお手伝いに窥いますよ。非才の身ながらこの身に賭けてお役に立ちます」

シャツハは謙虚ながらも、自身の意思を表に出す。

「クロノ提督や騎士はやはり貴女の大切なご友人。万が一の事があつては大変ですから」

カリムはシャツハの言葉を聞きながら、抱えた不安が消えていくように感じた。

「ありがとうシャツハ。でも平気よ」

カリムはシャツハに顔を向ける。

「はやては強い子だし、今日は特に祝福の風はもちろんリインフォース守護騎士達ヴォルケンリッター

も一緒に、はやての幼馴染の本局のエースさん達も一緒にだとか」

カリムが根拠を打ち明ける。

「それは私の出番はなさそうですね。大人しく貴女のそばについているとしましょう。あと、お茶をお淹れしますね」

「ええ。お願い」

シャツハは恭しく頭を下げてから、望むことを告げるとカリムは笑顔で応じた。

第二話 「舞台表と舞台裏」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

ヴォルケンリッター達もまた機械兵器と交戦する。

無事に任務が完了し、転送ポートへと向う中で
機械兵器と戦っているAゼロノスとプロキオンを発見
する。

Aゼロノスはどのような対応をするのか？

第三話 「ファーストコンタクト」

第三話 「ファーストコンタクト」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。
感想を書いてくれている皆様。

前書きのコーナー。

何にしようか悩んでいます。

第三話 「ファーストコンタクト」

『仮面ライダー』

力なき者達には『希望』となる。

力持つ悪には『恐怖』と『絶望』が降りかかる。

そして自身が名乗るのではなく、他者に呼ばれた時に初めて価値を持つ『称号』でもある。

*

第162観測指定世界定置観測基地。

「発掘員の方は観測隊が無事に確保しました」

グリフィス・ロウランがマイクを片手に状況を説明していた。

「なのはさ……高町二等空尉達護送隊は妨害を避けて運搬中です」

シャリオ・フィニーノがモニターを見ながらアースラへと報告していた。

「あと、別区域で出現したイマジンは一体がロストしています。恐らく青い仮面ライダーが倒したと思われます」

グリフィスが締めくくるようにAゼロノスの事も報告した。

*

観測指定世界の軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「はい了解。現場とアースラは直通通信が通らなくなっているから、シャーリーとグリフィス君で管理管制をしっかりとね」

エイミィ・リミエッタが報告を受けながらも、先輩としてアドバイ

スを送った。

『はい!』

グリフィスが即座に返事する。

『あ、現場の方にヴィータさん達が到着したようです』

そう言くと、モニターに映るシャリオの姿が消えた。

「クロノ君。どう思う?この仮面ライダーについて……」

エイミーがグリフィスが送ってきた映像データをモニターに映す。

それはAゼロノスとプロキオンがクリケットイマジンと戦闘している映像だった。

「明らかに良太郎やモモタロス達、桜井侑斗とは別人だな。自身の火力不足を熟知しながら的確にパートナーイマジンと連携して戦っている。あの二組にはない戦法だ」

クロノ・ハラオウンが手を顎に当てながら、映像を凝視しながら分析する。

「確かに良太郎君やモモタロス君達のような派手さはないよね。それに桜井君のような豪快さもないしね」

エイミーが映像を見て思った事を口に出す。

「^{ウチ}管理局にスカウトするには極めて困難な存在だな。『電王』ではなく『ゼロノス』なんだからな」

クロノも六年前の際に仮面ライダーゼロノスを知っているため、映像に映っているのはタイプの『電王』ではなく『ゼロノス』に近いからそうに呼んでいる。

「さしずめ、『青いゼロノス』ってところ?」

エイミーが便宜上の呼称を決めた。

「そんなところだろうな……」

クロノはAゼロノスの変身者の心境を想像してみた。変身するたびに周囲の人間が変身者を忘れていく事。

しかし変身者自身は周囲の人間を憶えているというズレ。

その恐怖に常に向き合わなければならぬ覚悟。

並の人間では到底できない事だろう。

仮にスカウトをしても時空管理局には『青いゼロノス』に見合う代価を払う事が出来ないのは事実だ。

金銭や権力程度では到底対価とは呼べないだろう。

「エイミィ」

「わかってるって。青いゼロノスについて分析してみるよ」

エイミィがモニターに映っているAゼロノスについて分析を始めた。

*

「ひでえなこりゃ。完全に焼け野原だ」

騎士服姿のヴィータとシャマルがシグナムとザフィーラ（獣）と合流して、周囲を見回した。

彼女の言うように、巨大なクレーターが一つ出来上がっており建造物等はその機能を果たす事は永遠に叶わなくらいに破壊されていた。

「かなりの範囲に渡っているが、汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

シグナムがクレーターが出来た大まかな原因を告げた。

「ここまでの話を総合すると、聖王教会から報告・依頼を受けたクロノ提督がロストロギアの確保と護送を三人に要請」

シャマルが宙にモニターを表示して、シャリオとこれまでの出来事をおさらいを始める。

「平和な任務と思っていたらロストロギアを狙って行動しているらしい機械兵器が現れて、こちらのロストロギアは謎の爆発って流れで合ってるかしら？」

『はい！合ってます！』

シャマルが確認するように訊ね、シャリオが首を縦に振りながら肯定した。

「聖王教会といえば、主はやてのご友人の……」

「うん。多分騎士カリムからの依頼ね。クロノ提督ともお友達だし」

シグナムが『聖王教会』というフレーズから何かを思い出し、シャルが補足した。

ザフィーラが現場をじっと見たまま動かないヴィータに気付く。

「ヴィータ。どうかしたか？」

「ザフィーラ。別に何でもねーよ。相変わらずこーゆー焼け跡とか好きになれねーだけさ」

ヴィータの表情はどこか憂いを秘めていた。

「戦いの跡はいつもこんな風景だったし……。あんまり思い出したくねえことも思い出すしさ」

ヴィータの脳裏にはある出来事が甦っていた。

雪が降っている次元世界。

自分は瀕死の重傷になっている一人の魔導師を抱き上げて、必死に声をかけていた。

魔導師は息も絶え絶えになりながらも、自分の事を気遣ってくれていた。

普段なら鬱陶しいと思うってしまうが、この状況下でそんな風に思えるほど自分は非情ではなかったようだ。

主である八神はやて以外で涙目になったのはこれが初めてなのかもしれない。

白がメインカラーとなっているバリアジャケットは所々がくすんでいたり、血が赤いシミとなっていた。

その瀕死の重傷を負っている魔導師とは高町なのはだった。

「ヴィータ。何を怖い顔をしている」

シグナムが背を叩く事で、ヴィータは現実に戻った。

「リインが見たら心配するぞ」

シグナムはヴィータの頭を穏やかな表情で撫でながら気遣う。

それは『ヴォルケンリッターのリーダー』というよりは『八神家の家族の一員』という意味合いの方が強いと思われる。

「うるせーな。考え事だよ。あと撫でるな……」

ヴィータはぶすつとしながら返す。

「よし……。調査魔法陣展開！アースラと無限書庫に転送してね！」
「はい！」

シヤマルはベル力式の魔法陣を展開しながら、シャリオに送った。

*

護送隊飛行ルートの四名はというと。

寄り道せずに荷物であるロストロギアを持って、空を駆けていた。

「えーと。もう一度確認するです」

なのはの左肩に乗っかっているリインが『夜天の魔導書』に記していた。

「アンヌキワザガルドAMFというのはフィールド防御の一種なわけですよ？フィールド系というのは……」

「基本魔法防御四種の内の一つだね。状況に応じて使い分けたり組み合わせたり、あと私達のバリアジャケットやリインの騎士服もバリアやフィールドを複合発生させているんだよ」

なのはが追加説明した。

基本魔法防御には『バリア』、『シールド』、『フィールド』、『物理装甲』がある。

『バリア』は攻撃を防御膜で相殺して柔らかく受け止めることを旨とする最も汎用性の高い防御。

『シールド』は攻撃と相反する魔力で固く弾く・反らす事を旨とする防御。

『フィールド』は範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御で、通常は複数の種類を重ねバリアやフィールドの補強として使用するものである。

『物理装甲』は素材強度による物理的防御。つまり魔法を用いずに直接防ぐものである。

リインはサラサラと『夜天の魔導書』に記していく。

「AMFはフィールド系ではかなり上位に入るけどね」

なのはの言うように、フィールド内に入った魔法を無効化にするのだから下位であるはずがない。

「魔力攻撃オンリーのミッド式魔導師は咄嗟に手も足も出ないだろうね」

「ベル力式でも並の使い手なら威力増強は武器の魔力に頼っている部分が多いし、ただの刃物や鈍器やと潰すんは辛いんよ」

「フェイトとはやてはミッド式魔法、ベル力式魔法でもAMFを攻略するのは至難なものだと打ち明ける。

「でも、なのはさんやフェイトさんは簡単に……」

「リンが両手を広げてドカーンという表現をする。

「距離があつたし、向こうのフィールドが狭かったからね」

「なのはが先程の戦闘の事を思い出していた。

「さっきのやり方だと発動地点がフィールド外じゃないとダメなんだ」

「先程の戦闘でなのはとフェイトは機械兵器が発生させたAMFの外で魔法を発動させていた。

「囲まれたりしてフィールド内に閉じ込められたら結構ピンチだね。AMF内で魔法を発動するのは難しいから」

「仮に魔導師がAMF内にいた場合、フィールド内では魔法が結合しないため効果そのものを起こす事が出来なくなるのだ。

「そうなると、魔導師の基礎体力で勝負になる。

「飛行や基礎防御もかなり妨害されちゃうし、やり方はあるけど高等技術なんだ。リンは気をつけないと大変な事になるよ」

「なのはの説明にフェイトが補足しながらも、リンに忠告した。

「はうあ！？そうでした！リンは魔法がないと何もできないんです」

「リンがフェイトに忠告され、AMF内にいる自分を想像していた。

「いい機会だからその辺の対処と対策も覚えておこうね」

「はいです！あの、なのはさん」

「ん？なあにリン」

「電王さんやゼロノスさんだったらどうなるんでしょうか？」

リンが電王やゼロノスならばどのように対処するのか興味を持ったのか訊ねてきた。

「そうだねえ。良太郎さん達なら私達みたいに変に考える必要はないから、はやてちゃんと言った刃物や鈍器で直接潰すだろうね」

「それってAMFの中でもですか？」

「うん。良太郎さん達は魔導師じゃないからAMFの事なんて関係なく戦えるからできるんだよ」

「良太郎達は魔法とは違うエネルギーで戦っているからAMFそのものが効果がないんだよ」

「私等が知る限りでは『最強』やいうてもおかしいね」

なのはとフェイトの説明をリンは聞きながら、『夜天の魔導書』にメモしていく。

「リン。いい機会やから高町教導官に教えてもらうんやで」

「はいです！」

はやてが締めくくり、リンが元気よく返事をした。

*

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラは飛行はせずに、足でその場を歩いて警戒していた。

現在の所は怪しい魔導師も機械兵器もイメージも姿を現してはいなかった。

「そっぴやシグナム。一緒の任務って結構久し振りだな」

暇といえば失礼だが、無言でいる必要はないのでヴィータは口を開いた。

「そうだな。我々みな担当部署が離れてしまったからな」

シグナムはヴィータに言われるまで失念していた。

「あたしとシャマルは本局付きでザフィーラはもっぱらはやてかシヤマルのボディガード。ま、家に帰れば顔を合わせるし関係ねーけ

どな」

「確かに。緊急任務がない限り休暇には皆揃うしな」

ヴィータは自分達の状況を言い、シグナムは首を縦に振って腕組をして納得していた。

「しかし来年には引越しか。海鳴のじーちゃん、ばーちゃんともお別れになるなあ」

寂しそうにゲートボール仲間の老人達をヴィータは思い出す。

海鳴ではやて以外に出来た多分最初の『友達』だ。

「住所が変わるだけだ。今生の別れというわけではなからう。会いたいと思えば会えるさ」

シグナムは前向きに考えるようにヴィータに諭し、ヴィータは黙って首を縦に振る。

「ちよつと間が開いたらもう変身魔法でも使わねーと会えねーな。育たねえから心配される……。実年齢だけならじーちゃん達より上なんだけどな」

ヴィータは呟く。

「違うない」

シグナムも自身の掌を見ながら同意した。

ヴォルケンリッターは精神的に成長を遂げてても外見が成長する事はない。

良い解釈をするならば『不老』ととれる。

ただし悪い解釈ならば『化け物』のレッテルを貼られても仕方がない。

実情を知る者ならばその手の事には触れたりほしくない。

しかし、ヴィータの友達の老人達やシャマルの井戸端会議の主婦達、シグナムが講師を勤めている剣道場の同僚などがそのような事を知っているはずがない。

だからこそ時が経って海鳴に訪れた際には外見をある程度は変えておく必要がある。

「あらー、じゃあ私がちゃんと調整して可愛く育った外見に変身さ

せてあげる」

シャルが笑顔でヴィータにしてみれば出来るなら関わりたくない笑顔を向ける。

「……いい。自分でやる」

「私達は当分は服装や髪型程度で誤魔化せるだろうな」

ヴィータは否定し、シグナムは魔法を用いずに済む対策を言う。

「ザフィーラはいいよな。犬だから」

「……狼だ」

ヴィータはこの手の事を考えずに済むザフィーラを羨ましがる。

ヴィータは知らない。ザフィーラはザフィーラで苦労がある事を。

いつまでも子犬というのも怪しまれるため、微妙な大きさを考えておかねければならないのだ。

この手の事は先輩に当たるアルフに聞いてみようと考えていた。

「それにしてもミッドへの引越しは色々と不安も多いのよ。いい物件もまだ見つかっていないし……」

シャルは左手を頬に当てながら、家庭関係で悩む主婦のような仕種をする。

家賃と部屋割り。

ご近所付き合い。

交通の便宜。

引越しの際に持っていく物等など。

「その辺はお前に任せた」

シグナムとヴィータは声を合わせて丸投げした。

「……」

ザフィーラが何かを感じたのか、顔を上げた。

「ザフィーラ。どうした？」

「森が動いた。座標を伝える。シャル調べてくれ」

「うん！」

ヴィータの問いにザフィーラが短く答えながらも、シャルに指示を出した。

『こちら観測基地！先程と同系と思われる機械兵器を確認！地上付近で低空飛行しながら北西に移動中。高高度飛行能力があるかどうかは不明ですが、護送隊の進行方向に向っているようです！狙いはやはり……ロストロギアなのではないでしょうか？』

「そう考えるのが妥当だな。主はやてとテストロッサ、なのはの三人が揃って機械兵器ごときに不覚を取るとは万に一つもないだろうが……」

「運んでいるものがアレなものね……」

シヤリオの報告を聞きながら、シグナムとシヤマルの表情は真剣なものになっていた。

「こつちで叩きましょう」

「ああ」

シヤマルの提案にシグナムは異論を唱えなかった。

どこか気負っているような雰囲気を漂わせているヴィータがいた。

「観測基地！守護騎士から二名出撃する！シグナムとヴィータが迎え撃つ！」

シグナムがヴィータの背を叩きながら告げた。

「あに勝手に決めてんだよ」

「何だ？将の決定に不服があるのか？」

「……ねーけど」

我に返ったヴィータはシグナムを睨む。

「こつちは二人で大丈夫」

「危機あらば駆けつける」

シヤマルは笑顔でザフィーラはいつもの表情でこれから出撃する二人を見送ろうとしていた。

「守るべきものを守るのが騎士の務めだ。行くぞ。その務めを果たしにだ」

「しゃーねーなあ！！」

シグナムの言葉にヴィータは表面上は面倒臭そうに答えた。

「主はやて。シグナムです。邪魔者は地上付近で我々が撃墜します」

シグナムは、護送隊のはやてにこれからの事を告げる。

「テストロッサ。手出しは無用だぞ」

「はい……。わかってます。シグナム」

ついでにフェイトに付け足した。

「なのは。オメーもだぞ」

「はあい。片手塞がつてるしね」

ヴィータがなのはにも釘を刺しておいた。

「二人とも、おーきにな。気をつけるんやで」

「はい」

「うん！」

はやての激励と気遣いの言葉に二人は頷く。

「シグナム。AMFの話は聞いてると思いますけど、気をつけてくださいね……」

「テストロッサ……。貴様、誰に物を言っている？己が信ずる武器を手にあらゆる害悪を貫き、敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ」

シグナムはフェイトの忠告が杞憂だと言いながら、レヴァンティンを鞘から抜剣する。

「魔導師達みてーにゴチャゴチャやんねーでもストレートにブツ叩くだけでブチ抜けんだよー！」

ヴィータが強気な表情を浮かべながらグラーファイゼンを構える。

「リインもあたしの活躍、しっかり見てろよ！」

「はいです。ヴィータちゃん」

リインにもしかと見ておくように言う。

「「出撃！！」」

シグナムとヴィータが空を翔けた。

「機械兵器、移動ルート変わらず。あまり賢くないようですね」

「特定の反応を追尾して攻撃範囲にいるものを攻撃するのみのようです。ですが対航空戦能力は未確認です」

「お気をつけて！」

シャリオとグリフィスの実況を聞きながら、シグナムとヴィータは

宙で戦闘態勢をとっていた。

「未確認^{アンノウン}なのはいつものことだ。問題ない」

シグナムは特に驚く様子もなく告げながら、前を睨んでいた。

「……………」

ヴィータはあの時の事を思い出していた。

（あの日、なのはを襲ったヤツも未確認だった）

ヴィータの拳がブルブル震える。

（あたしもなのはもいつも通りのはずだった。問題なんて何もなければずだった）

グラーファイゼンを握る力が強くなる。

（誰もが認める無敵のエースがいつもどおりに笑ってたから。だから気付かなかった…………）

左手に小型の鉄球を出現させる。

（あんなのは…………あんな思いはもう二度と…………）

小型の鉄球が宙に浮いてクルクルと回転を始める。

血みどろになって息も絶え絶えになっているなのはの姿を思い出し、ヴィータの表情は険しくなる。

「だからまとめてぶつ潰す！！」

ヴィータは宣言と直後に鉄球を機械兵器に向って投げつけた。

シグナムもレヴァンティンを直剣のシュベルトフォルムから蛇腹剣状態のシュランゲフォルムへと切り替えて、機械兵器に向って繰り出していた。

ドオオオンという爆発音が響いた。

*

アースラ艦内のメインモニタールームでエイミィとクロノがAゼロノスの分析をしながらも、シグナムとヴィータの戦闘ぶりをモニタ

ーで見ていた。

「シグナムとヴィータはやっぱり凄いね。未確認でもモノともしない」

エイミイが無難な感想を述べた。

「合流地点までもう少しだし、そろそろアースラも回収の準備もしとこうか」

クロノは黙ったままだ。

「クロノ君。どうしたの？ 難しい顔をして」

「……ああ。この後のことを考えていた」

「あと？」

「それよりもこの青いゼロノスについて何かわかった事は？」

クロノは話題を切り替えてAゼロノスについての調査結果を聞く事にした。

「まずこの姿はバリアジャケットでも騎士服でもないね。正真正銘魔力以外のもので構築されてる。次にこのゼロノスの使っている武器は材質のサンプルでもあればもっとわかるんだろうけど、電王じゃなくてゼロノスが使っている武器と同じ材質と見ていいね」

電王、ゼロノスのデータがないためこれが初の『仮面ライダー』のデータとなる。

「AAAランクの魔導師と照合しても凄いという言葉しか出ないね。全く劣ってないもん」

「今のところはイメージを倒すだけが目的みたいだが、今後どう出るかはわからないな……」

クロノは変身者が何かをやらかすのではないかと考える。

「でも何かをやらかすつもりなら既にやってるような気がするよ。」

このゼロノスだって『時の列車』持つてるはずだし」

「それもそうだな……」

エイミイの言うとおりだと納得したクロノは任務に集中する事にした。

＊

護送隊の四人はというと、空を駆けたままだった。

「シグナム達は大丈夫そやね」

「うん」

「シグナムもヴィータちゃんもカッコいいです」

「だね」

はやてとフェイトは現在戦っている二人の心配は無用だといい、リンはなのはと共にその二人の活躍ぶりを宙に出現させているモーターを見て喜んでいた。

「はやて。特別捜査官としてはどう見る？今回の事」

「んん？そうやなあ。あのサイズのAMF発生兵器が多数存在してるゆーんが一番怖いなあ。今回、この世界に出現してるんが全部であつて欲しいけど……」

はやては話を振られるものの、冷静に的確に特別捜査官としての意見を告げる。

「そうでないなら規模の大きな事件に発展する可能性も十分にある。特に量産が可能だったりするとなあ。執務官と教導官はどんなやる？」

はやてはひとしきり言い終えると、今度はなのはとフェイトに訊ねた。

「私はあの未確認がロストロギアを狙うように設定されているのが気になるよ。獵犬がいるって事は狩人がいるって事だもんね」

教導官としての、なのはの感想は機械兵器の後ろにはロストロギアを狙う誰かがいるという事だ。

機械兵器がニワトリのように卵からポコポコ生まれてくるわけではないので、必ず製作者がいると踏んでいるのだろう。

「ロストロギアを狙う犯罪者……。技術者型の広域犯罪者は一番危険だね」

フェイトが執務官としての感想を述べる。

それから五分後に護送隊はヴォルケンリッターと合流した。

*

アースラ艦内ではクロノとエイミイが今後の事を話し合っていた。
「そういった事件になると管理局でも対応できる部隊はどれくらいあるか、人や機材が揃ったとして動き出せるまでどれくらいかかるのか、そんな状況を想像すると苦い顔にもなるさ……」

クロノは手を顎に当てて、難しい顔をしていた。

「なるほど。指揮官の頭の痛いところだね」

エイミイがため息をついてしまう。

組織の体制からしてお先真つ暗なのかもしれないのだ。

「はやても指揮官研修の最中だからな。一緒に頭を悩ませる事になるよ……」

「でもまあ、今回の事件資料と残骸サンプルはそのテの準備の貴重な交渉材料でしょ。事件がどう転ぶかわかんないのなんていつもの事だし」

「それはそうなんだがな」

プレシアテストロッサ

「なんとかなるよ。『P・T事件』も『闇の書事件』もその後の色々な事件の後も、みんな何とかしてきてるんだもの」

頭を抱えているクロノに対して、エイミイは前向きに考えるように促した。

*

なのは、フェイト、はやて、リインはヴォルケンリッターと合流して喜び合っていた。

任務もほぼ完了して、第162管理世界転送ポートへと向おうとしていた時だ。

『こちら観測基地！転送ポートへと向う進行ルートに先程の未確認

が出現。一つの箇所集まろうとしています！その数五十いえ百、に、二百です！！」

シャリオの報告にその場にいる誰もが目を丸くしている。

自分達に向って襲い掛かってきたのでもせいぜい十体くらいだ。

その二十倍が一箇所集まるなんて余程そこには何かがあるのだろうと考えるのは自然な事だった。

「そこには何かあるの？」

なのはが代表してシャリオに訊ねる。

『ちよつと待ってください……。あ、いました！多分ですけどその機械兵器は青い仮面ライダーを標的にしてるんじゃないかと思われます！！』

その単語にそこにいる誰もが心動かされたのはいうまでもないことだ。

正体不明にして神出鬼没。

イマジン現れる所必ず出現する謎の戦士。

『ハラウン提督からです。その青い仮面ライダーの救援に向うようにとの事です』

了解！

その場にいる誰もがその命令に従った。

*

見渡す限りの機械兵器。

一つ目も二百あると気持ち悪い。

「うえゝ。怖いですよ。ユノさん」

プロキオンが機能停止した機械兵器を爪から引き抜いてから踏みつけると、Aゼロノスに何とかしてほしそくに訴える。

「流石にあんなにたくさん相手するとなると気が滅入ってきそうだ

ね……」

そう言いながらもDランスを分離して、Dバレットに切り替えてからひたすら引き金を絞る。

銃口から放たれた無数の光線は機械兵器の腹部を貫いていく。貫かれて機能停止した機械兵器はバタバタと倒れていく。

Dバレットは引き金を一回絞る事で五発の光線が発射される。

それらは確実に四発は命中しているので一回で四体は機能停止していることになる。

「よぉーし！僕もやります！！」

主が頑張っているのに自分が怠けるわけにはいかないと感じたプロキオンは中腰に構えて、機械兵器に向っていく。

殴る。蹴る。投げ飛ばす！この三つでドオンともボオンとも音を立てて蹴散らしていく。

プロキオンの足元には機械兵器の残骸ばかりが落ちていく。

それでも前を見ると、減っていく気配がまるで感じない。

「……ユノさん！なのさん達がこっちに向ってきます！！」

プロキオンはモモタロスとは違うモノを感知する嗅覚を持っている。モモタロスがイメージの臭いを探る事が出来るのに対して、プロキオンは魔導師の匂いを探る事が出来る。

「どのくらいで来るかわかる？」

Aゼロノスが至近距離なのでDバレットからDダガーへと切り替えて、機械兵器の腹部を突き刺す。

バチバチバチツと音を立てて機能停止する。

「匂いの距離からして二分後です！」

そう言いながらも迫ってくる機械兵器を倒していく事はやめない。

「二分か……」

Aゼロノスがプロキオンの報告を聞いて、思案する。

恐らくこの機械兵器の異常な数は伝わっているはずだ。

そして自分達が戦っている事もだ。

そうなると時空管理局の魔導師である以上、救援に向ってくるのは

自然の流れといえる。

（正直救援してもらえるのはありがたいけど……）

Aゼロノスは本音としては救援はありがたいが、何かと面倒な事になる事も予測できていた。

（間違いなく職質（職務質問）を受ける事になるね……）

助けた見返りというわけでは間違いなく、そのような流れになるだろう。

プロキオンが爪で機械兵器を突き刺して、投げ飛ばして後方の機械兵器数体を誘爆させていた。

「そこの仮面ライダーさんとイマジンさん！！」

上空から声がしたので、Aゼロノスは顔を上に向ける。

なのはを始めとする魔導師陣営だった。

「どうしよう？」

プロキオンがAゼロノスの側まで寄る。

「こうなったら乱暴だけこの手しかない！！」

Aゼロノスは左手に握られているDガッシャーをダガーからバレットへと切り替えて、空へと向ける。

そして引き金を絞る。

無数の光線が空を昇った。

「ひゃあああ！！」

なのはは思わず、後方へと反射的に退がる。

救援に向おうとしたなのは達の前に一直線に無数の光が走ったのだ。

「なのは！大丈夫か！？」

ヴィータは気遣うと同時にAゼロノスを睨み、グラーファイゼンを構えていた。

シグナムもレヴァンティンを抜剣しようとしていた。

「当てる気がない？」

「何でそう思うん？ フェイトちゃん」

フェイトの呟きをはやてが聞き逃さなかった。

「あの位置からなら確実に当てる事はできたのに、そうしなかった。威嚇かもね」

「私達を現場に近寄らせないようにする事？」

シヤマルの言葉にフェイトは首を縦に振る。

「でも、いきなり威嚇射撃するのはどうかと思うけど……」

なのはは乱暴な手だと言う。

「拒む理由があるのかもしれない……」

ザフィーラが推測する。

「それにしてもあの仮面ライダー……。ゼロノスに似てるなあ。とりあえずいきなり撃つてくるところからして、私等の救援を望んでないって事になるからしばらく様子見やな」

はやてはAゼロノスを全体をしたから上へと舐め回すようにして見ながら感想を述べながら、その場で待機を選ぶように皆に伝える。

「うん。そうだね」

なのはも首を縦に振って、Aゼロノスとプロキオンの戦闘を凝視する事にした。

救援に向ってくるアースチームに向けて『威嚇』目的で光線を放ったAゼロノスは宙で留まっている様子を見てから、すぐに正面へと視線を向けた。

その間にもプロキオンが機械兵器を持ち上げて、膝に向って下ろして『へ』の字にさせていた。

「残り百体くらいかな……」

「やりますか？」

プロキオンは、なのは達がいるのでAゼロノスを『ユノさん』とは呼ばない。

「おいで！ プロキオンー！！」

「はい!!」

Aゼロノスはゼロノスベルトのチェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードを抜き取り、裏返す。

青色のカラーから白色のカラーの面に変えた。

バイオリンで奏でているミュージックフォーンが流れる。

そして、クロスディスクに向かってゼロノスカードをアプセットした。
『シリウスフォーム』

ベテルギウスフォームの電仮面が消え、プロキオンがフリーエネルギー体となってAゼロノスの体内へと入り込む。

上半身に、白色がメインで裾に青色のポイントカラーがされている袖のないロングコート――プロキオンクロークが出現する。

両肩には三本の爪のような飾りが施され、両下腕にはプロキオンが用いていた武器であるプロキオンクロークが装着されていた。

プロキオンクロークの背部にはプロキオンの顔が出現しているが、これはデネブ同様に『飾り』だったりする。

そして電仮面にはミサイルの弾頭部分がAゼロノスのデンレールを無視して、中央に走り出して停止すると回転しながら六芒星状に展開して電仮面となる。

仮面ライダーANOTHERゼロノスシリウスフォーム（Sゼロノス）の完成である。

「はああっ!!」

Sゼロノスを中心に小さなクレーターが出来た。

タンタンタンとリズムカルに両足をその場で動かす。

そして……

「ゴオオオオオ!!」

プロキオンが主人格となっており、Sゼロノスはプロキオンクローを構えて機械兵器へと向かっていった。

「イマジンと一体化して戦うところまでゼロノスと同じなんて……」
はやては先程のフォームチェンジを目の当たりにして目を丸くしていた。

心なしかはやてはどこか落ち着かない様子だった。

「はやてちゃん。大丈夫？」

なのはがそんな様子のはやてを心配する。

「う、うん。大丈夫だよ。あのゼロノスは侑斗さんやデネブちゃんじゃないって事はわかってるて」

はやては笑みを浮かべて返すが、内心穏やかではない事をなのはは簡単に予測できた。

（はやてちゃんが一番気にしてるのは、ゼロノスの変身に必ず消費するゼロノスカードにおける変身者に対する記憶の消費……）
なのはは知っている。

桜井侑斗から貰った一枚のゼロノスカードを見ると、『懐かしさ』や『恋しさ』と同時に『決意』のようなモノが表情に宿っている事を。

（もし私の知っている人達がゼロノスカードを使っていたとしたら……）
なのははもしもの事を想像し、正直ゾツとする結果だった。

『変身者に関する記憶』を周囲が忘れる事を承知で使う変身者は怖い。

『忘れてしまう』という事すら忘れてしまう自分も恐ろしく感じた。
ゼロノスカードを使用する事に関してはどちらもが被害者であり、加害者でもある。

（ユーノ君だったらどういう風な事言うかな……）
今起きている事をユーノ・スクライアに言えばどのような返答が出るかをなのははSゼロノスの戦闘を見ながら考えていた。

機械兵器を蹴飛ばし、踏みつけ、寄ってくる場合は回し蹴りで機能停止させていた。

眼前に迫ってくる場合はプロキオンクローで突き刺す。

「うりゃああああああ!!」

これまでの戦闘でわかる事はSゼロノスは一度たりとも機械兵器に攻撃をさせていない。

攻撃を受ける前に全て機能停止させているのだ。

まさに『攻撃は最大の防御』という格言をやつてのけているのだ。

(あと二十五体。踏ん張ってプロキオン!)

「はい!!」

深層意識のユーノがSゼロノスに励ます。

それから十分後に残り二十五体の機械兵器もみな地面に転がる事になった。

「終わりました」

Sゼロノスはそう言いながら、チェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードをまた裏返してベルギウスフォームへと戻す。

プロキオンとAゼロノスへと分離する。

直後に空の一部が歪んで線路が敷設されていく。

空間からAゼロノスとプロキオンに向つて三両編成の『時の列車』

であるANOTHERライナー(以後:Aライナー)が停車した。

一両目であるAライナー・ミサイルのドアが開いていた。

乗り込もうとするAゼロノスとプロキオン。

「ま、待って下さい!」

なのはが呼び止めた。

プロキオンが先に乗り込み、Aゼロノスは足を止める。

「あの、貴方は一体誰なんですか?」

なのはが単刀直入に訊ねてきた。

「ANOTHERゼロノス」

「僕、プロキオンです!」

なのはの質問にAゼロノスとプロキオンは素直に答えた。

「艦に戻るまでが任務じゃないの？気を抜いちゃダメだよ」

Aゼロノスはからかうようにして、なのはに告げるとAライナーに乗り込んだ。

ドアが閉まり、車輪が回り始めて走り出した。

仮面ライダーANOTHERゼロノスと高町なのはのファーストコンタクトはこうにして幕を閉じた。

なのはは知らない。

自分がフェイトやはやてのような運命に巻き込まれようとしている事を。

なのはは知らない。

Aゼロノスの正体が最も近い存在である事を。

第三話 「ファーストコンタクト」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

食事会に合流するために駆け足でアースラへと向う
ユーノとプロキオン。

その頃、クロノとヴェロツサはロストロギアや
Aゼロノスの事を語り合っていた。

盛り上がるアースラ艦内。

その中でユーノ、プロキオン、アルフ、シャマル、
ザフィーラも話していた。

第四話 「打ち上げ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059y/>

仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

2011年11月18日01時24分発行